
遊戯王5D's another story

チャーリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's another story

【Nコード】

N8693R

【作者名】

チャーリー

【あらすじ】

ゼロリバーズが起こらなかつたネオ童実野シティが舞台。遊星は不動産家の教育精神に基づいて、原作のような成長を遂げていく。その彼を描いた物語。

アカデミア入学

はじめにこの物語はゼロリバーズが起こらなかったと仮定してストーリーを進めていきます。

僕の名前は不動遊星。年は六つ

今日からデュエルアカデミアネオ童実野シティウエスト校初等科に入学するピカピカの一年生だよ。

このネオ童実野シティにはアカデミアは二つある。ウエスト校と、イースト校だ。

僕のお父さんはシティで一番優秀な科学者だからトップスに住んでいるんだ。

だから自然とウエスト高への入学が決まった。(ちなみにトップス以外の子はイースト校に入学する。)

「遊星、そろそろ出るわよ。」

「わかった、待ってて。」

僕は外に出た。

するとメイドさんが声をかけてくれた。

「あら、遊星君。いよいよアカデミアに入学するのね。」

「うん!」

「がんばってね。」

僕のお家はトップスの中でも大きさ、装飾などのすべてにおいてトップクラスだ。

だからお家で働いている人もたくさんいる。

「じゃあ、行ってくる。」

お父さんが執事のおじさんに声をかける。

「お気をつけて。」

玄関ドアの間から声が聞こえた。

僕たちは車に乗った。

僕のお家はガイシャではなくコクサンシャに乗っているらしい。

みんなベ○ツだとかフェ○ーリに乗っているが家はある会社の○Ｔ
- Rの34に乗っている。

（もちろんエンジンはRB26です。しかし結構改造してあってハイウェイで常時350キロで走ります。）

その上運転してるのはお父さんだ。

ウンテンシュッという仕事もあるらしいけど、パパは

「これが私の趣味だから。」

と言って雇っていないらしい。

・アカデミアにてー

僕は今初等科の教室にいる。

「何かみんな体がごついな。」

先生が入って来た。

「今日からみんなの担任になった、天上院明日香です。これから、一年間よろしくお願いします。」

「若いつてわけじゃないけど、キレイな人だな。」

すると、一部の男子生徒から、

「ねえ、彼氏いるの?」

「へて、おい。いきなりそれ?しかもタメ口」

「はいそついうことは後で聞きますから、今は先生の言うことを聞いてください。」

その後も話は続く。

まあ、会話は省略するけど、先生は初期のアカデミアの卒業生で今、シティで二番目に大きい財閥の万丈目グループの社長とは同級生らしい。それと先生は他のアカデミアから異動して来たらしく、この学校の「一年生」らしい。

「はい、明日もみんなしっかり来てね。」

「じゃあね。」

俺は靴を取りに下駄箱へ向かって歩こうとした時、

「おい、オメー俺の靴取ってこいよ。」

という財閥系の生徒達の声が聞こえてきた。すると

「おい、こいつのも持ってくるなら当然俺のも持ってくるよな。」

と言ったのは三番目の財閥の息子だ。跡取りではなさそうだったが、多分家では同じことをされたのだろう。

「おい、やめろよ。」

思はず声が出てしまった俺。

「何だ、オメーは。この俺に口出しするのか。」

「やめろと言っているんだ。」

「上等だ。オメー名前は。」

「不動遊星。」

「H、H A H A H A H A H A！話にならねー。御雇組は引っ込んでろ。こいつの財閥はな、もはや必要なんだよ。」

「いや、この世の中に不必要なものは一つもない。」

「く、おい。誰かこいつをつまみだせ。いや、オメーが俺の靴を取ってこい。」

「断る。」

「何だと！」

「断ると言っただのわからないのか。」

「ふざけんじゃねえー！！！」

と言ってアイツは拳を俺に向けてきた。

俺はその拳を受け、カウンターの連続ストレート五連発喰らわせ、最後にタイキックを御見舞した。

そして何事もなかったかのように教室を後にした。

遊星くんから遊星へ

入学して早くも一年半が経った。

この間遊星は入学初日の件もあり、財閥系のグループは「イケているグループ」となっていったため、遊星は次第にクラスで浮いていた。

しかし遊星は全く気にも留めなかった。

彼にとってクラスメートは常にデュエルするだけの仲間であり、それ以下でもそれ以上でもなかった。

そんな彼が気を引くもの。

それは・・・

「やっぱりこの型はいいよな。」

と言って広げているのはDホイールの雑誌だった。

モーターメント機関の第一人者である父を持つ遊星には当然のことだろう。

そして将来は自分の手でDホイールを作りたいと思っていた。

――夏休みにて――

この日はイースト校に通っている幼なじみ達との久しぶりの集まりだった。

（ジャックやクロウではありません。博士の研究者仲間の友達です。）

その帰り道。

「おお、正義感のお強い遊星SAMAはイースト校の落ちこぼれどもとしか付き合えないですな。」

あのクラスの中で一番の財閥の息子が遊星に言い寄って来た。

「そうそう、不必要なモノはない。その通りだよ。なぜなら俺たちの金のために働くという義務があるんだからな。」

「話はそれだけか。」

「何だと!」

「.....」

遊星は放っておこうと思い家路へ急いだ。

その途中、尿意を感じたので近くの公園のトイレに入った。

すると外から、

「おい!なんだよこりゃ?」

「全部クズカードばかりじゃないか。」

「お、持っていましたぜ。氷結界の龍グングニール。」

「まあ、こいつでいいや。」

という声が聞こえてきた。

コトを済まし、トイレから出た遊星が見たものは・・・

「つかむんじゃねーよー!!」

あの財閥系の連中が五歳ぐらいの女の子を殴り飛ばしていた瞬間だった。

ついに遊星の堪忍袋の尾が切れた。

遊星はゆっくりと歩き出した。

そして、奴らの前に立って言い放った。

「やめる。」

すると、

「おやおや、遊星SAMAでもカードはもらっんですね。」

そうからかった連中だったがその場にいた皆すべてが、遊星の殺気に圧倒されていた。

「おい、デュエルしろよ。」

「上等だ。やってやろうじゃねーか。」

「デュエル。」

(LP4000 VS LP4000)

「先行はどうぞ。遊星SAMA。」

「俺のターン。ロードランナーを召喚。カードを一枚伏せてターンエンド。」

「フツ、俺のターン。マジックカード発動、強欲な壺。デッキから二枚ドローする。ちなみに禁止カードは俺ルールだ。」

「さらにマジックカード、暗黒界の取引。デッキから一枚ドローし、手札から一枚捨てる。」

遊星が引いたカードは調律。捨てたカードはボルトヘッジホッグ。

対して相手が捨てたカードは暗黒界の武神ゴールド。

「墓地へ捨てた暗黒界の武神ゴールドの効果、発動。このカードが手札から捨てられた時、フィールド上に特殊召喚する。」

「攻撃力2300。」

「さらにチューナーモンスター魔轟神クシャノを召喚。レベル5の

暗黒界の武神ゴールドにレベル3の魔轟神クシャノをチューニング。
シンクロ召喚。いでよ、魔轟神ヴァルキュルス。」

「攻撃力2900。」

「墓地の魔轟神クシャノの効果、手札の魔轟神と名のついたモンスターを捨てることでこのカードを手札に戻す。俺は魔轟神クルス捨てて手札に戻す。さらに魔轟神ヴァルキュルスの効果、手札から悪魔族モンスターを墓地へ捨てて発動。俺は魔轟神ソリキウスを墓地へ捨てて、デッキから一枚カードをドローする。バトル、ヴァルキュルスでロードランナーに攻撃!!」

「ロードランナーの効果。このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。」

「クッ、ターンエンド。」

遊星くんから遊星へ（後書き）

遊「はじめまして、不動遊星です。」

チャ「がんばってね。デュエル。」

遊「おい、執筆しろよ。コナンが泣きついてきたぞ」

チャ「はい、すみません・・・」

遊星 覚醒！！（前書き）

お気に入りしてくれた皆さま、本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

遊星 覚醒！！

「俺のターン！俺は手札からマジックカード調律を発動。デッキからシンクロンと名のついたチューナーを一枚手札に加える。その後デッキからそのモンスターのレベルだけデッキの上からカードを墓地へ送る。俺はジャンクシンクロンを手札に加え、三枚のカードを墓地へ送る。」

墓地へ落ちたカードはシールドウイング、シールドウォーリアー、スピードウォーリアー。

「そして俺はジャンクシンクロンを召喚。ジャンクシンクロンが召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、スピードウォーリアー。レベル2のスピードウォーリアーにレベル3のジャンクシンクロンをチューニング。」

「何、シンクロ召喚だと！？」

「集いし星が、新たな力を呼び覚ます、光指す道となれシンクロ召喚！いでよ、ジャンクウォーリアー！！」

「何だと思えば、そんなゴミ戦士か。まあ、そんなカードをデッキに入れてるのはお前だけだろーな。」

「ジャンクウォーリアーの効果発動！このカードの攻撃力はフィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分、アップする。ジャンクウォーリアーの攻撃力が300ポイントアップ。」

「それでも魔轟神ヴァルキュルスの方が攻撃力は上。」

「まだだ、手札から装備魔法、ファイティングスピリッツを発動。このカードは相手モンスター一体につき、攻撃力を400ポイントアップする。よって、ジャンクウォリアーの攻撃力は・・・」

「攻撃力3000!!?」

「行け、ジャンクウォリアー、魔轟神ヴァルキュルスを攻撃、スクラップフィスト!!!」

「うわぁー!!」

(LP4000 vs LP3900)

「ターンエンド。」

「まだまだ、俺のターン。マジックカード、サンダーボルト。これで貴様の場のモンスターはすべて灰になる。」

「ジャンクウォリアー!!!」

「さらに俺は墓地の魔轟神ソリキウスの効果、発動。手札のカード二枚を墓地へ捨てて、このカードを特殊召喚する。さらに魔轟神獣ケルベラルを通常召喚。行け、俺のモンスターたち、ダイレクトアタックだ!!!」

「おわー!!!」

(LP800 vs LP3900)

「ここで再びヴァルキュルスと言いたところだが、もうデッキにない。命拾いしたな。ターンエンド。わかっただろう。所詮きれいごと。権力の前には無力なんだよ。サレンダーしたらどうだ？」

「そうそう、そもそもこのお方に逆らったお前が悪いんだよ。」

「こりゃーお前のデッキも没収かな。」

「いやいや、こんな奴のクズなデッキをもらったってたかが知れてる。いつそのこと妥協して俺たちの召使ってことでどうだ？」

「いいね、クズにとっては最高の名誉だ。」

「ということだ、クズはクズらしくサレンダーしたら？」

「お兄ちゃん。」

女の子が涙目で遊星を見つめる。

しかし遊星は優しい声で

「大丈夫だ。」

と言った。

「やれやれ、負け試合をまだ続けるのか。さすがクズだな。」

「さっきからクズ、クズ、うるさいぞ。それしか言葉を知らないのか？」

「何？」

「俺は絶対あきらめない。この子のためにも、俺は戦い続ける。」

（頼む、キセキでも何でもいい、俺に力を！！）

その時、遊星に異変が起こった。

なんと自分の右腕が赤く光り出したのだ。そしてその光は龍の頭の形をしていた。

そして彼女にも。

そして遊星は自分のデッキを目をやる。するとあのカードが光っているのだ。

・時はさかのぼり、遊星の誕生日ー

「遊星、お誕生日おめでとう。」

「ありがとう、父さん、母さん。」

「遊星、これが今年のプレゼントだ。」

それは一枚のカードだった。

「何、このカード。真っ白だよ。」

「そう、それはいつか、お前が大きくなったら見えるようになるカードだ。今は俺たちからのお守りだと思えばいい。」

「うん、ありがとう。」

・現在・

（父さん、母さん、俺に力を！！）

すると、このカードが見えたのだ。

「スターダストドラゴン。」

そして遊星は自分のデッキを見た。

そして遊星の頭の中に一つの答えが出る。

「俺の、ターーーーン！！！！」

「俺はデブリドラゴンを召喚！」

「またチューナーか。」

「デブリドラゴンのモンスター効果、このカードが召喚に成功した時、墓地の攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、シールドウィング。さらにトラップカード、エンジェルリフト発動。」

墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、スピードウォーリアー。」

「一気にモンスターを三体召喚だど!!!?」

「行くぞ、レベル2シールドウィングとレベル2スピードウォーリアーに、レベル4デブリドラゴンをチューニング。」

「集いし願いが、新たに輝く星となる!光指す道となれ!シンクロ召喚、飛翔せよ、スターダストドラゴン。」

「何だ、このモンスターは。」

「さらに装備魔法、巨大化を発動。このカードの効果でスターダストドラゴンの攻撃力は倍になる。」

「攻撃力5000だど!!!?」

「行け、スターダストドラゴン。魔轟神獣ケルベラルに攻撃。響け、シューティングソニック。」

「うわぁー!!!」

(LP800 vs LPO)

「くそ、覚えてやがれ。」

そう言って彼らは逃げるようにその場を去った。

「ありがとっ、お兄ちゃん。ねえ、名前はなんていうの?」

「不動遊星。君は？」

「私は十六夜アキ。」

「よろしくな、アキちゃん。」

「うん、こちらこそよろしくね。遊くん。」

「えっ、？」

「どうしたの？遊くん？」

「何でもない、お家まで送ってあげよう。もう暗いしな。」

「うん。ありがとう。」

遊星はアキの背中に手をやり、押すように歩いていった。

「そう言えば、遊くん。何で、私のお手手と遊くんのお手手だけ光ったんだろうね？」

「さあ、アキちゃん、真っ白なカード持ってる？」

「うん、これだよ。はっ。」

「やっぱり、君もそうなのか。」

「ブラックローズドラゴン。何か、私たち、お友達になれそうだね。」

無邪気な笑顔でアキは遊星を見つめた。

「そう、だな。」

学校でもめった話しかけられない遊星は、顔を真っ赤にして照れていた。

「遊くん、顔、赤いよ。」

「違う、これは夕日のせいだ。」

「そっか。」

「あ、ここだよ私のお家。」

「え、ここって。」

そう、ここは遊星の家の真向かい。

「まさか、遊くんのお家って……。」

「あれだよ。」

そう言っていると、

「遊星、一体今までどこに行ったの？」

「母さん。」

すると反対側からも

「アキ、どうしたの。こんな時間まで。」

「ママ。」

「じゃあ、またな。」

「うん。またね。遊くん。」

二人は、母親に連れられ、家に帰って行った。

遊星 覚醒！！（後書き）

チャ「遊くん、巨大化はガチすぎない？」

遊「お前までその呼び方で呼ぶな。」

チャ「次回もお楽しみに・・・」

遊「逃げるなーーー！」

英雄伝説、序章（前編）（前書き）

英雄伝説、序章（前編）

あの夏休みから遊星を取り巻く環境は劇的に変化した。

すでにクラスの中では財閥系のグループに嫌気が差し始めていた。

そんなときに遊星が彼らを完膚無きまでに叩きのめしたのだから、クラスの中で英雄と言われるようになった。

もともとルックスも良い遊星だから、学園内の人気も急上昇していた。

しかし当の本人は満足しているどころか、正直困っているところである。

そんな時、天上院先生が学生時代から思いを寄せていた遊城十代さんとの結婚が決まり、一週間の新婚旅行に出かけることになった。

その間は、教員主任のハイトマン先生が担当になるらしい。

「私の教育理念は勝ち組のエリートであります。しかしこのクラスはエリートと自称している生徒たちの成績を見せてもらいましたが、とてもエリートとは言い難い成績であります。よって、あなたたちは全員退学といたすであります。」

「ちょっと待ってください。このクラスの遊星はアカデミア始まって以来の最高の成績なんですよ。」

「ふん、いくら低レベルのクズ生徒がそのような成績であったとし

ても、エリートたちの成績があれば無いも同然です。」

「あんたの言いたいことはわかった。だったら俺たちだけを退学にすればいいじゃないかよ。」

「いいえ、あなたたちの成績が悪いのは周りのみなさんが手を貸さなかっただけであります。」

「明日香先生はどうなるんですか？」

「彼女は、来年からは養護の先生となってもらいます。彼女も今までエリートコースを歩んできたらしいですが、あなたたちの担任になったのが運のつきですね。」

「「そんなのあんまりです!!」」

「あなたたちのようなクズどもは私に意見を言う資格などないであります。」

「おい。」

遂に遊星の毒舌が火を吹く時がやって来た。

「さっきから自分はエリート、俺たちはクズ、クズと言っているがお前はそういうやりかたでしか自分を表現できないのか？」

「何ですと！？私はただ事実を言っているだけであります。」

「だったら、それが事実かどうか試してみろ。」

「どうやってですか？」

「もちろん、デュエルでだ。」

「望むところであります。勝ち組が使う勝ち組デッキの強さを見せてつけてやるであります。」

・デュエル上ー

「俺の先行、ドロー。俺はマジックカード調律を発動。デッキからジャンクシンクロンを手札に加え、デッキの上から三枚のカードを墓地へ送る。」

墓地へ落ちたカードは、チューニングサポーター、ダメージイーター、クイックシンクロン。

「さらにシールドウイングを守備表示で召喚。ターンエンドだ。」

「私のターン。フフフッ。私は手札から古代の機械石像を召喚。さてこの低レベルモンスターを使って皆さんに特別授業を見せてあげましょう。」

「特別授業？」

「そう、低レベルモンスターの正しい使い方を披露するであります。」

手札からマジックカード、機械複製術を発動。このカードの効果で私のデッキから古代の石像を二体特殊召喚するであります。」

「一気にモンスターを三体召喚だと？」

「さらに古代の機械石像の効果。このカードをリリースすることで、手札の古代の機械巨人を特殊召喚するであります。」

「あ、あのカードは！？」

観客席にいる財閥系のグループが騒ぎ出した。

「知ってるの？」

「知ってるも何も、あれはデュエルモンスターズ界でも伝説のレアカードと言われてるカードだ。」

「ええー、でも何でそんなカードを貧乏エリートの先生が持っているの？」

「このカードはデュエルアカデミアのエリート教師のみが使うことを許されたビンテージモンスターなのであります。それと貧乏は余計であります。」

「ごたくはいい。さっさとデュエルを続けよう。」

「いいであります。三体の古代の機械巨人でシールドウィングを攻撃であります。古代の機械巨人は守備モンスターを攻撃したとき、貫通ダメージを与えるであります。」

「俺は手札から、牙城のガーディアンの効果、発動。このカードを捨てることで、自分フィールド上のモンスター一体の守備力を1500ポイントアップする。」

「ということは、シールドウィングの守備力は2400。古代の機械巨人の攻撃力は3000。その差600ポイント。それが三回だから合計ダメージは1800ポイント。」

「くっ。」

(LP2200 vs LP4000)

「まだまだ、これで終わりであります。マジックカードレベルサンダーを発動。私のフィールド上に存在するモンスターのレベルの合計×100ポイントのダメージを食らうであります。」

「古代の機械巨人のレベルは8、それが三体で24。だから2400ポイントのダメージで遊星のライフは……。」

「0!!!?」

「そんな……。」

「負けないで、遊星……!!」

「そうだ、俺は負けるわけにはいかない!墓地のダメージイーターの効果を発動。このカードと手札のカード一枚を除外することで、相手が発動したダメージを与える効果を回復効果に変換する。」

「てことは、」

(LP4800 vs LP4000)

「フン、ゴキブリ並みの生命力ですね。ターンエンド。」

「俺のターン。フツ。」

「何がおかしいでありますか？」

「今度は俺が魅せる番だ。真の高レベルモンスターの姿を。俺はジャンクシンクロンを召喚。ジャンクシンクロンが召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスターを特殊できる。来い、チューニングサポーター。そしてこの瞬間、速効魔法発動、地獄の暴走召喚、このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールドに攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時発動できる。特殊召喚されたモンスターをデッキ、手札、墓地から可能な限り特殊召喚する。俺は二体のチューニングサポーターをデッキから特殊召喚。」

「私のフィールドにはすでに古代の機械巨人が三体、デメリットはなしですか。」

「行くぞ、チューニングサポーターはシンクロ召喚の素材となる時、レベル2として扱うことができる。レベル2のチューニングサポーター二体と、レベル1のチューニングサポーターにレベル3のジャンクシンクロンをチューニング。」

「シンクロ召喚ですと!？」

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光指す道となれ!シンク

「召喚、粉碎せよ、ジャンクデストロイヤー!!」

「何かと思えばただの攻撃力2600のシンクロモンスターでありますか。」

「まだだ、墓地にいったチューニングサポーターの効果、発動。このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた時、デッキからカードを一枚ドローできる。さらにジャンクデストロイヤーの効果発動。このカードがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材となったチューナー以外のモンスターの数まで、フィールド上のカードを破壊できる。俺がシンクロ素材として使ったチューナー以外のモンスターは三体、よって、三体の古代の機械巨人を破壊する。タイドル・エナジー!!」

「ああ、私の古代の機械巨人が・・・。」

「やったー。古代の機械巨人を倒した!!」

さらに決闘は続く。

英雄伝説、序章（前編）（後書き）

遊「ハイトマンの初手、アニメと一緒にじゃないか？」

チャ「だって、アンティークギアあまり詳しくななんだもん……。」

遊「おい、勉強しろよ。」

チャ「はい、すみません。」

遊「それよりいつになったら俺に春が来るんだ？」

チャ「リア充め……俺なんか彼女と自然消滅しちまったのに……。」

遊「そうか……。」

チャ「リア充なんか消えちまえー」

遊「後でこいつは殺しておきます」

チャ「助けてー！！」

英雄伝説、序章（後編）（前書き）

すみません、変なところで切ってしまつて。本当は一話で書く予定だったのですが、セリフが予想以上に重かつたのでこんなことになつてしまいました。

英雄伝説、序章（後編）

「さらに手札からマジックカード、シンクロキャンセルを発動。このカードの効果でジャンクデストロイヤーをエクストラデッキに戻すことで、その素材となったモンスターを特殊召喚する。」

「ということはジャンクシンクロンと三体のチューニングサポーターが遊星のフィールド上に蘇る。」

「そして再びレベル2のチューニングサポーター二体とレベル1のチューニングサポーターにレベル3のジャンクシンクロンをチューニング。」

「またレベル8のシンクロモンスター!？」

「集いし願いが、新たに輝く星になる。光指す道となれ。シンクロ召喚！飛翔せよ、スター・ダスト・ドラゴン!!」

「何だ、あのドラゴンは？」

「みんな驚いてるぜ。」

「まあ、当然さ。俺だって正直ビビったぜ。聞いたこともないカードだったからな。」

「行け、スターダストドラゴン。響け、シューティングソニック！」

「クッ。」

(LP4800 vs LP1500)

「ターンエンド。」

「私のターン。マジックカード、地割れ。このカードの効果でスターダストドラゴンを破壊する。」

「終わった。いくら強いモンスターでも、あの地味な魔法で死んで行くからな。」

「スターダストドラゴンの効果、発動。フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、このカードをリリースすることでその効果を無効にする。ヴィクテム・サンクチュアリ。」

「スターダストドラゴンが……。」

「ふう、これで次のターンは凌げたようですね。ターンエンド。」

「この瞬間、墓地のスターダストドラゴンの効果を発動。このカードが自身の効果で墓地へ送られた場合、そのターンのエンドウェイズ時に復活する。」

「何ですと、インチキ効果もいい加減にしなさいよ！」

「まあ、インチキくさいな……。」

「俺のターン、行けスターダストドラゴン、俺たちの未来を切り開け。シューティング・ソニック！」

「うわー!!！」

(LP4800 vs LP0)

「そんな、私の勝ち組デツキが・・・。」

「デュエルに勝つにはモンスターだけでは勝てない。トラップだけでも、マジックだけでも勝てない。すべてを一つになることで初めて勝利というものが見えてくる。そしてそれ以外にももっと大切な何かがある。それを教えるのがあんた達の仕事じゃないか？」

「・・・・。」

「そしてその何かの源になるのは、デュエルに対する熱い思いだ。俺たちはデュエルへの情熱しか持っていない。だけどそれを奪う権利は誰にもない。」

「その通りなノーネ。」

「クロノス校長。」

「私も同じようにシニョール十代に教えられたノーネ。まるで十代のようなノーネ。」

「十代？それって明日香先生と結婚した。」

「そのとうりなノーネ。」

「遊城十代・・・・。」

一体どんなデュエリストなのだろうと思いをめぐらす遊星であった。

- 翌日 -

デュエルアカデミアのエリート教師を破った初等科生徒・不動遊星の名は、またたく間に広がっていった。

今日は海馬コーポレーション主催のパーティーが開かれている。

不動一家は、一家揃ってO・T・Rに乗ってここまでやって来た。

早速、不動博士がお偉いさん達にあいさつに行くといって、遊星の手を引っ張った。

どこに行っても話題は遊星の話で持ちきりだった。

成績優秀デュエルの腕はもはや教師以上。その实力を見てみたいという話で持ちきりだった。

するとここで子供vs大人のタッグデュエル対決大会の予選が始まった。

そして代表選の出場者が決定した。

子供代表は遊星とアキになった。

互いに相手を寄せ付けない圧倒的な強さで勝ち上がってきた。

「がんばろうね、遊くん。」

「ああ。」

そして大人代表はイエーガー課長とカイバーマンとなった。

なぜカイバーマンがいるかというと、十代が自らの学園生活をつづった小説が大ヒットし、特にカイバーマンはたちまち大人気となった。

そして総帥自らの命令によって、カイバーマン制作プロジェクトがスタートした。

このカイバーマンはそのプロジェクトの完成を示す完成品である。

この二組のデュエル、どうなるのだろうか？

「それでは子供vs大人のタッグデュエル対決を開始します。」

「「でゆえる！！！！」」

「先行は子供ペアの十六夜アキちゃんからだ。」

「私のターン。私はヴァイオレットウィッチを守備表示で召喚。カードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン。俺はマジックカード、未来融合フィーチャーフュージョンを発動。このカードはエキストラデッキから融合モンスター一体を選択しその素材となるモンスターをデッキから墓地に送る。俺は青眼の究極龍を選択、デッキより三枚の青眼の白龍を墓地へ送

る。さらにリバーズカードを一枚伏せてターンエンド。」

「おおっと、これはカイバーマン、墓地、フィールドに強力なアドバンテージを取ったぞー！」

「俺のターン。マジックカード調律を発動。このカードの効果で俺はクイックシンクロンを手札に加える。そしてクイックシンクロンのレベルである5枚のカードを墓地に送る。」

墓地に落ちたカードは、シールドウォリアー、ボルトヘッジホッグ、チューニングサポーター、ダブルサイクロン、ガードブロック。

「俺は手札を一枚捨ててクイックシンクロンを特殊召喚。さらに墓地のボルトヘッジホッグの効果、自分フィールドにチューナーが存在するとき、墓地から特殊召喚できる。レベル2のボルトヘッジホッグにレベル5のクイックシンクロンをチューニング。」

「いきなりシンクロ召喚だと・・・。」

「集いし思いがここに新たな力となる。光指す道となれ。シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロウォリアー！」

「攻撃力2800!？」

「さらに装備魔法、ジャンクアタックを発動。このカードを装備したモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを与える。さらにニトロウォリアーの効果、発動。マジックカードカードを発動したターンの、一回の戦闘のみ攻撃力が1000ポイントアップする。」

「何だと!!?」

「行け、ニトロウオーリアー。ダイレクトアタック。」

「甘いぞ、遊星!リバーカードオープン!エネミーコントローラ
」。

「何?」

「このカードはコマンド入力することで効果が発動する。ライフを
1000払い→・↑・←・↓・A!」

ガタ、ガタ。

「このコマンドによって貴様のモンスターを破壊する。」

「くそ。」

(LP4000 vs LP3000)

「カードを一枚伏せてターンエンド。」

「不動遊星君何とたった一人、しかもワンターンで1000ポイントのダメージを与えたぞー!」

さらに決闘は続く。

英雄伝説、序章（後編）（後書き）

チャ「ああ、疲れた」

遊「それより何でシンクロキャンセル使ったんだ？」

チャ「あの後トリシューラって行きたかったけどお前持っていないし・
・・」

遊「それは反則だ。」

チャ「そうだね。後、アキちゃんをちゃんと守ってあげてね。」

遊「それは俺のセリフだ。」

チャ「そうだったね。だって遊星、アキちゃんのコト・・・スミマ
セン。」

遊・チャ「次回もよろしくお願いします。」

カイバーマンの逆襲（前書き）

すみません。去る3月26日に我が家の愛犬であった黒のラブラ
ドールのめいが死去し、その悲しみに浸ってしまいました。

もう大丈夫ですので、これからもよろしく願います。

カイバーマンの逆襲

「イッヒツヒツヒ。では私のターンですね。参ります。ドロー。」

「続いてのプレイヤーは治安維持局代表のイエーガーだ。」

「私はジェスターコンフィーを特殊召喚。さらにカードを四枚伏せて、ターンエンド。」

「おおっと。これは守りに入ったのか!？」

「私のターン。私はコピープラントを召喚するよ。さらにマジックカード、発動。偽りの種。このカードの効果で手札のレベル2以下のモンスターを特殊召喚できるだ。ダークヴァージャを特殊召喚。」

「

「この瞬間、私のトラップを発動。永続罠、不協和音を発動。このカードの効果でお互いのプレイヤーは3ターンの間シンクロ召喚することはできない。」

「ウソ……。」

「まずい。このターン召喚したモンスターはすべて攻撃力が1000もない。次のターンで大ダメージを食らうぞ。」

「遊くん……。」

「大丈夫だ、アキ。」

「うん。カードを一枚伏せてターンを終了するね。」

「この瞬間、ジェスターコンフィーの効果、発動。このカードが自身の効果で特殊召喚されている時、このカードと相手フィールド上に存在するモンスター一体を手札に戻す。私はヴァイオレットウィッチを選択。」

「……。」

「俺のターンだ。俺はマジックカード魂の解放を発動。このカードは互いの墓地のカードを5枚まで除外することができる。俺は墓地の青眼の白龍三体を除外する。」

「おおつと！！ここで仕掛けてきたぞカイバマン！」

「そして手札からマジックカードを発動する。次元融合！！！」

「何だと！？」

「このカードはライフを2000ポイント払って発動する。互いに除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚できる。俺のもとに蘇れ！青眼の白龍！！！」

(LP4000 vs LP1000)

「攻撃力3000！？」

「これが伝説のレアカード。青眼の白龍。」

「ぶつかしい……。」

「この瞬間私はトラップカードを発動するわ。トラップカード、捨て身の宝札。このカードは私のモンスターの攻撃力の合計が相手フィールド上のモンスターの攻撃力の合計より低い時、発動できる。私はカードを2枚ドロウできる。」

「ふん、こざかしい。どんなカードを引こうと、貴様たちの運命は決まっている。真正正銘貴様らの最後DA!! 行け、青眼の白龍たちよ。滅びの疾風弾!!!」

「甘いわよ。トラップ発動! 棘の壁。このカードは自分フィールドに存在する植物族モンスターが攻撃対象にされた時、発動できる。相手フィールド上の攻撃表示モンスターをすべて破壊する。」

「何だと!!?」

「俺のブルーアイズが……。ターンエンド。」

「さあ、これはチャンスだ! 決め切れるか?」

「俺のターン。俺は手札から大寒波を発動。この効果で次のアキのターンまで互いにマジック、トラップカードは発動できない。」

「何だと!!?」

「俺はスピードウォリアーを召喚。行け!」

「攻撃力900か、まだ足りないな。」

「いや、スピードウォリアーは召喚したターンのバトルフェイズ

時のみ攻撃力が倍になる。」

「何だと!?!」

「ソニックエッジ!!!!」

「うわぁー!?!?!」

「決まったー!!!この激戦を制したのは不動遊星君、十六夜アキちゃんの子供代表チームだー!!!」

「やったな、アキ。」

「ありがとう。遊くん。」

そう言ってアキは遊星の頬にキスをした。

「なっ。」

「よかったな、遊星。かわいいガールフレンドができて。」

「からかわないでくれ、父さん!」

「いや、それでもないかもしれないぞ。アキちゃんは将来絶対美人さんになるからな。」

「ああ、遊星君ならアキを任せられる。」

「もうパパ。調子に乗らないで。」

實際まんざらでもないと思っていた遊星であった。

カイバーマンの逆襲（後書き）

遊・どうしてこうなった!?

チャ・何で?

遊・どうしてフィニッシャーがスピードウオーリアーなんだ?

チャ・いや、いつも過労死してるからたまにはいいんじゃない?

遊・それと、何でアキはあんなことを?

チャ・幼馴染なら当然じゃない?

遊・アキをそんな軽い女にするな!!

チャ・どうして?

遊・それは・・・その・・・。

チャ・遊星。いつコクるの?

遊・やめろー!!!!!!

チャ・遊星がキレちゃったから逃げるね。次回もよろしく願います。

遊・俺を置いて行くなー!!

結成、チーム遊星（前書き）

ども、ご無沙汰してます。最近もっこりにはまっているチャーリーです。こんな私ですので、もしかしたら危ない方向に進むかもしれません。

- あしからず・・・。 -

結成、チーム遊星

海馬コーポレーション主催のパーティーでの出来事は伝説となっていた。

「キッズの天才コンビ・黒薔薇のアキと、サターンの遊星」の名はもはや知らぬものがないほど有名になった。

その後、アキはウエスト校に入学し、常に遊星と共に行動した。

そしてこれからの出来事は、遊星の初等科最終学年の時の話である。

・不動邸前―

「じゃ、行ってくる。」

「ええ、気をつけてね。遊星。」

「たく、母さんったらもう俺は子供じゃないから大丈夫だ。朝の取材にも慣れたからな。」

「おいおい、遊星。油断は禁物だぞ。」

「ああ、わかってるよ。父さん。」

「よし、行って来い。」

「ああ！」

俺がアカデミアに入学して早五年。

いろいろなことがあった。

明日香先生の旦那の十代さんがこの学校に赴任してきたり、テレビ番組を持ったりと、この五年で俺の取り巻く環境は激変した。

入学した時はクラスで浮いていて、友達すらまともに作れない状況だったのだが、月日が経つほどに俺に話しかける人も増えて今では学園みんなが俺の仲間だ。

「おはよう。何そんなところでボオーっとしてるの？遅刻するわよ。」

「ああ。行くか。」

俺は毎朝アキと一緒にアカデミアに行っている。この時間に次の大会での作戦やお互いの悩みなどを交換している。

「はあ、遊星とアカデミアに一緒に行けるのは今年が最後なのね。」

「ああ。でもまた二年すれば一緒に行けるようになるさ。それにライディング選択は今の校舎の隣だしな。」

アカデミアでは五年生の時にデュエルの授業がスタンディングとライディングに分かれる。

ライディングの教科にはスタンディングとライディング、さらにD

ホイルなどが含まれる。

選択するには相当の努力と勇気を要する。

遊星はもちろんライディングを選択した。

「そうね。大丈夫よね……。でも……。」

「ん？どうした？」

「いや、なんでも。」

（遊星人気あるから、教室から出られないんじゃないかしら？今でさえ食堂に行くまで一苦労なんだから。）

「おはよう。遊星。」

「おう、龍亜、龍可。」

「おはよう、いよいよ俺たち双子もデュエルアカデミアに入学だぜ。」

「もう、龍亜ったら昨日からこんな感じなのよ。」

「いいじゃない。私も入学式の際は興奮して眠れなかったわ。」

「さっすがアキ姉ちゃん。ナイスフォロー。」

「だからと言って、担任の先生の話の時間に寝るんじゃないぞ。」

「わかったよ。遊星。じゃあ、寝なかつたらまたデュエルしてね。」

「言つと思つた……。」

「へへ。」

「さあ、行こう。遅れるぞ！」

「「うん！」」

遊星、アキ、龍亜、龍可、この四人の前に今までで最大の試練が待ち受けているとは、この時は想像もつかなかった。

・アカデミアにてー

「これより、始業式を始めます。まず最初にクロノス校長のお話です。しっかり聞きましょう。」

「皆さん、おはようなノーネ。」

「「おはようございます。」」

「いい返事なノーネ。外では桜が……。」

（長いので省略。）

「最後に、今年へは、六年に一回のアカデミア杯の開催年なノーネ。」

「アカデミア杯？」

「これはデュエルアカデミアネオ童実野シティ・イースト校とウエスト校の真剣勝負の一世一代の大イベントなノーネ。このイベントは二大会連続で個人、団体共に我がウエスト校が勝っているノーネ。今回の諸君達の大会も絶対勝つノーネ！！」

・翌日・食堂にてー

「ねえ、遊星。どう思う？」

同じテーブルに座っている遊星にアキが語りかけた。

ちなみになぜアキが遊星の隣にいるかというと、アキのサイコパワーが止められるのが遊星のみだからである。

「アカデミア杯のことか。」

「ええ、一体競技は何なのかしら？」

「もう、決まってるじゃん。」

龍亜が自信満々の顔で答えた。

「決まってるって？」

「もちろん、デュエルさ。」

「ああ、その通りだ。」

「へへー。」

「何で知ってるの？遊星？」

龍可が遊星に聞いた。

「さつき、明日香先生から実施要項をもらってきた。」

「さすが遊星。」

「まあな。校長から直々にウエスト校初等科の主将に指名されたかな。」

「主、主将！？」「」

「ああ、とにかくこれを見てくれ。」

「まず、個人競技は初等科がスタンディング、中等科がスタンディングとライディングだ。そして、初等科、中等科、の獲得点数の合計で勝敗が決まる。」

「でも、全員でサバイバルでもやるのかな？」

「いや、両校とも各学年八人の代表を出して、そのうち、二学年のずつの三つの階級に分けてトーナメントを行う。」

「なるほどね。」

「で、団体戦は？」

「団体戦は、初等科、中等科共に八チームまでエントリーが可能だ。一チーム三人の補欠一人で構成される。」

「学年とかの指定は？」

「中等科は特にないけど、初等科はチームリーダーは高学年生がなるのが条件だ。そして、チーム名はキャプテンの名前で統一されている。」

「でも、俺たち……。」

「ぴったり四人ね。」

「てことは……？」

「ああ、俺もそのつもりだ。今日から俺たちは「チーム遊星」だ。」

「おお!! やってやるぜ。」

「じゃあ、今日終わったら俺の家へ来てくれ。そして明日から申し込みが始まる。それで書類を出せばオーケーだ。」

「わかったわ。じゃあ、後でね、遊星。」

「ああ。」

「バイバイ。」

「おう。」

・再び不動邸ー

「遊星。何で集まったの？」

「まさか……。」

「違うわよね……。」

「補欠決めた。」

「ガーーーーン。」

「まあ、順当にいけば龍亜よね。」

「いいもん、この前の俺たちが初めてあつたキッズ王者決定戦だつて、遊星はチャンピオン、アキ姉ちゃんは準優勝、龍可はベスト4、俺は……決勝トーナメント一回戦負け。」

「いや、チーム戦となればアドバンテージや相性が重要になる。」

「アドバンテージ？」

「そうね、アドバンテージを取るという面では龍可の「シモツチバイン」よりも龍亜の「Dフォーマー」のほうが速効性があるわよね。」

でもその刺さりはもろいけどね。」

「どういうこと?」

「例えばシンクロという面で考えてみましょう。龍亜の「Dフォーマー」は強力なサポートカードとシンクロモンスター+装備魔法の強力なパワーアドバンテージを作る。」

「しかし特殊召喚を封じるのようなメタ系のデッキのまチームだと龍可のデッキの方が相性がいい。」

「なるほど。」

「だから一概に補欠だからといってゲームに出られないわけではない。」

「うん。」

「よし、じゃあ今から総当たりでデュエル大会だ。」

「「オー!!--」」

この結果、最下位は龍亜になった。

「まあ、当然だったわね。」

「龍可。そんなことを言わないでくれよ……。」

「ごめんね。」

という感じで、チーム遊星は順調にアカデミア杯への準備を進めていった。

結成、チーム遊星（後書き）

遊・そう言えば・・・

チャ・どうしたの？

遊・俺はいつ満足できる仲間と会える？

チャ・この大会の先で会えるよ。

遊・そうか・・・

亜・遊星！

遊・龍亜、どうしてここに？

亜・へへ、ここは男専用部屋だからね。

チャ・そうだったな・・・。

遊・試練って何だ？

チャ・龍亜、こっちきて

亜・何？

チャ・（こそこそと）負けるの。遊星が・・・。

亜・ウソー！！！！？

チャ・マジ。主人公補正なんて関係ない！！

遊・どうした？

チャ・これ以上はまずいな。次回もよろしく。

亜・チャーリーのバカー！！！！

敵情視察

俺たち「チーム遊星」は順調に個人戦・団体戦共に校内予選を突破し、無事本戦出場を決めた。

特に団体戦では、一番手の龍亜・龍可・二番手のアキのお陰で俺は大した出番がなかった。

本戦出場を決めた俺たちは、イースト校の校内予選が行われる総合デュエル場に来ている。

「やっぱでけーな。」

龍亜が着くなり興奮し様子で言った。

「龍亜、調子に乗らないの。」

すかさず龍可が水を差す。

「でも遊星。どこが出てくる見とつしのあるチームかわかってるの？」

アキが不安そうに聞く。

「ああ、それなら・・・。」

「おう、遊星じゃん。」

「みんな。」

「聞いたぜ。オメーら向こうの予選を圧倒的な実力で勝ち上がった見てーじゃん。」

「ありがとう。ところでお前たちの調子はどうなんだ？」

「まあまあってところかな。」

「お前らがその調子なら大丈夫だろ。」

「いや、そうともいかないな。何せ個人の能力には差があるけど、きれいに均等になるように分かれたから。」

「そうか。本戦で待ってるぞ。」

「ああ。」

「遊星、今のつて？」

「ああ、親父の研究者仲間の子供達だ。小さい頃はよく一緒に遊んでたからな。」

「そう。」

（私の知らない遊星の仲間。）

「さあ、行こう。もうすぐ始まるぞ。」

・ 出口にてー

「いやあ、接戦で面白かったね。」

「もう、龍亜ったら。本戦では私たちの敵になるのよ。」

「あつ。」

「でもさっきの人が言っていた通りね。どこも飛び出ているチームがなかったなんて。」

「……………」

「遊星？」

（何なんだ。この気配は……？）

「遊星つたらどうしたの？あなたらしくもない。」

「ああ。何でもない。」

そう言つて出口の扉を開けると、正面に中等科とみられる男が立っていた。

「貴様が不動遊星か。」

男は遊星に見下すような眼差しで睨みつけてきた。

「そうだけど、アンタは？」

「ふん。俺の名を知らんか。」

「あー!!?」

すると龍亜が声をあげた。

「知ってるの？龍亜。」

アキが問いかける。

「知ってるも何も、今シティ全体でカリスマと言われているジャック・アトラスだよ。」

「彼が・・・。」

「カリスマではない。キングだ。」

「で、俺に何の用だ。」

「デュエルだ。今ここでその鼻っばしをへし折ってやる。」

「いいだろう。」

「デュエル」

(LP4000 vs LP4000)

「俺の先行。ドロー。俺はマックスウォーリアーを召喚。カードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン。手札のレベル2モンスターフォースリゾネーターを墓地へ送ってパワージャイアントを特殊召喚。この効果でこのカードが特殊召喚されたとき、手札から捨てたモンスターのレベルだけ校カードのレベルを下げる。よってこのカードのレベルは4となる。さらに俺はダークリゾネーターを召喚。レベル4となったパワージャイアントにレベル3のダークリゾネーターをチューニング。」

「いきなりシンクロ召喚!？」

「王者の魂がこだまする。勝利の鉄槌よ、大地を砕け!シンクロ召喚、羽ばたけ・エクスプロードウィングドラゴン!!」

「攻撃力2400!？」

「行け、エクスプロードウィングドラゴン!マックスウオーリアーを攻撃。エクスプロードウィングドラゴンの効果、このカードの攻撃力より低いモンスターを攻撃した時、そのモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える。キングストム!!」

「うわぁー!!」

(LP2200 vs LP4000)

「カードを一枚伏せてターンエンド。」

「すごい、遊星からワンターンでこれだけのダメージを。」

「俺のターン！手札のボルトヘッジホッグを墓地へ送り、クイックシンクロンを特殊召喚。さらに手札からスピードウォーリアーを召喚。」

「どうして遊星はボルトヘッジホッグの効果を使わなかったの？」

「もう、この前の遊星の話をおぼれたの？」

「アドバンテージのこと？」

「そう。多分遊星は相手の腕を見て長期戦に持ち込もうとしているのよ。そのためにボルトヘッジホッグは温存。」

「レベル2のスピードウォーリアーにレベル5のクイックシンクロンをチューニング。集いし思いが新たな力を呼び覚ます。光指す道となれ！シンクロ召喚、燃え上がれ、ニトロウォーリアー！！」

「よっしゃあ！ニトロウォーリアーだ！！」

「行け！ニトロウォーリアー！ダイナマイトナックル！」

「これでジャックの場のエクスペロードウィングドラゴンを倒せるわ。」

「フン。甘いわ。貴様が反撃することなどお見ともし。罠カード、プライドの咆哮を発動！！このカードは自分フィールド上にモンスターが相手モンスターよりも攻撃力を下回っている時、発動できる。その差だけのライフを払うことでダメージ計算時のみ攻撃力を相手モンスターの攻撃力より300高くなる。」

「そんな、ニトロウオーリアーが・・・!?!」

「それだけじゃないわ。エクспロードウィングドラゴンの効果でニトロウオーリアーの攻撃力分のダメージ、つまり2800ポイントのダメージが遊星を襲う。」

「それって……………」

「碎け、ニトロウオーリアーを。キングストーム!!」

「うわぁー!!!」

(LP0 VS LP3600)

「そんな、遊星が……………」

「フン。口ほどでもない。貴様は所詮カリスマ。キングは常にその上に行く。」

不動遊星の完敗だった。

敵情視察（後書き）

チャ・遊星がなえたので今回は対談は致しません。次回もよろしく
お願いします。

甘え・そして非行

「ねえ、遊星どうしちゃったの？」

「さあ？」

龍亜と龍可が食堂のいつものテーブルで話している。そこにアキもやって来た。

「ねえ、アキ姉ちゃんはどう思う？」

「それは……。」

（遊星、一体どうしたの？）

あれから三日。遊星はアカデミアには来ているものの、いつものデュエルに対する熱い思いを感じることができなかった。

さらに精神的支柱を失った「チーム遊星」は、本戦出場チームの中でも一番準備が遅れていた。

「はあ。まったく、遊星は今何やっているんだよ!？」

「遊星……。」

一方遊星は、校舎でもとりわけ人影の薄い屋上で青空を眺めていた。

「はあ……。」

遊星の心は現実から逃げることしか考えられなかった。

しかし、あれから三日間ずっと同じ夢を見ていた。

もう遊星には成す術がなかった。

そこにある人物がやって来た。

「遊星……。」

「アキ……か？」

アキは食堂でいつも通り昼食を取っていたが、遊星の話をすればするほど彼女の心を締め付けた。

そして龍亜の心で我を忘れてしまったのだ。

<<もうあの遊星は死んだんだよ……>>

この一言がアキの心を守っていたバリアを貫いた。

そしてもうどうすることもできずに走り出した。

ただただ走った。

訳も判らずに走った。

そして屋上に辿り着き、遊星を見つけたのだった。

「どうした？」

いつも遊星の前に現れると聞こえるセリフだが、やはり今日の声は違うとアキは気がついた。

（声に魂が入ってない・・・。）

「いや、ちょっと嫌なことがあって・・・。遊星はどうしてここに？」

「俺は・・・わからない・・・。ただ自分が変わっていることが怖いかもしれない。」

「ジャックのこと？」

「・・・。」

「もう、いつそのことチームを解散したら・・・？」

「・・・どうしてだ？」

「当然でしょう！今の抜け殻のあなたがいてもただの足手まといよ！！」

「クッ・・・」

「だってそうでしょう！！昨日のプレマツチの時もそう。たかが一枚のリバーズカードにビクビクしちゃって！そんな女々しいデュエルしかできないから昨日は負けたのよ！！今のあなたは、私たちに
とって何にもならないわ！！ただの負け犬よ！！！！」

昨日のプレマツチで、遊星は個人戦の一回戦で敗れた。

しかも今までデュエルして一回も負けたことのない同級生に負けたのだった。

「それ以上言うな!」

「あなたにそんなことを言う権利でもあると思ってるの!!?」

「アキ……。いくらお前でも容赦しないぞ……。」

遊星から殺気が空気中に放たれる。

しかしアキはひるむこともなく

「殴りたきゃ殴んなさいよ!!今のあなたはホントに愚かな人ね。こんな人を信じていた私がバカだったわ。さようなら。もう顔も見たくないわ。」

「アキ!!」

アキは振り向かなかった。

アキは一人トイレの個室にこもった。

(少し言い過ぎたかしら……?)

でもアキにはどうすればいいのかわからなかった。

（私はただ、いつもの遊星が見ただけなのに……。私が遊星をさらに傷つけてしまった……）

アキは悔いでいっぱいになった。

そして涙がこぼれてきた。

その日アキは目を真っ赤にして、夜遅くにひっそりと家に帰った。

一方の遊星も自分に対する怒りでいっぱいになっていた。

もうすでに遊星にはデュエルへの純粋でまっすぐな心を失っていた。

そして遊星はアカデミアを後にし、一人シティに繰り出した。

「どうした、あんちゃん。」

遊星は一人の老人に話しかけられた。顔には黄色いラインが刻まれている。

「アンタは？」

「わしは柳というものだ。」

「俺は不動遊星……。」

「おお、あんちゃん！あの有名な……。」

「やめてくれ。俺はもうあの頃の俺じゃない……。」

しばらくの沈黙が二人の会話を遮る。

そこに大柄な男が現れた。

「おい、てめえら!!どこに突っ立ってやがる!!ときやがれ!!」

「ひい!!アンタは!!」

そう言うと、柳は頭を下げた。

「知っているのか?」

「なに、俺の名前を知れねーだ!!?そんな無礼がここで通じると思っているのか!？」

「あんちゃん、この人はプロのライディングデュエリストで、この辺を根城にしている暴走族の頭を張っている氷室仁だ。」

「何で、俺がこいつに道を譲らないといけない?」

「何!?小僧、今何と言った!？」

「何で道を譲らないといけないと言ったんだ!」

「テメー、なめた口ききやがって……。いいだろう。じゃあお前、俺と今からバトルしろ。」

「何？」

「だがバトルはデュエルじゃない。レースだ。」

「レース？」

「そうだ、ついて来い。」

そう言っで連れてこられたのはハイウェイの湾岸入り口だった。

「ルールは簡単。どっちが早くここに戻ってくるかだ。」

「いいだろう。」

そう言っで、遊星にDホイールが渡された。

「お前はそれに乗れ。」

こうして、遊星初の公道バトルが始まろうとしていた。

甘え・そして非行（後書き）

チャ・スミマセン。遊星をグレさせてしまつて……。次回の遊星は……

ご想像にお任せします。とにかく苦手な方はBACKで……

次回もよろしく願います。

走れ！飛べ！遊星！！

「カウント行くぞ！！」

それと同時に二台のDホイールから闘志に満ちたモーメントエキゾーストが空気を遮る。

「5・4・3・2・1・GO！！」

スタートと同時に二台同時にスタート。

「フン！このコースで氷室さんが負けるわけがない。」

「そうとも。氷室さんの突っ込みについていた者はまだいない。ましてやあのDホイールはたかが300馬力。氷室さんのDホイールの半分にも満たない。」

「突っ込みで離され、立ち上がりでも置いて行かれる。これは勝ち目がないぞ。」

「ああ、あのポイントに行くまでに勝負は決まったな……。まあ、全身を強打しただけましか……。」

一方バトルはというと、低速域の加速には定評があった氷室のDホイールが遊星を突き放す。

そして第一コーナー。

氷室は四速6000回転の200キロ近いスピードからのフルブレ

ーキングで確実にスピードを落とし、確実にコーナースピードに変えてゆく。そしてパワーの理を生かし、驚異的な立ち上がり加速を見せる。

一方の遊星はというと・・・

（くそ！何だ、このDホイールは！？低速域の伸びが最悪だ。）

二速から三速への鈍い加速に不満を持ちながら、第一コーナーに向かっていった。

「おい、来るぞ。」

「ああ、この第一コーナーの突っ込みでこの先の大体の展開が読めるからな。」

「どういうことだ？」

「この左コーナーを抜けると長いストレートがあるだろう？」

「ああ。」

「だから誰もが高速セクションのラインを描く。だけど氷室さんはいつもこのコーナーを低速コーナーのラインで抜けるんだ。それはこの直線の先はヘアピンと中速コーナーの超低速セクションだからなんだ。」

「つまりこのコーナーからのリズムをとると、次のコーナーでリズムを崩す。」

「そう言うこと。さらにこの次のストレートの先はこのコースで一番長いジャンプ地点だ。」

「つまりそこでアクセルを開けきれずに……。」

「そうだ。さらに奴が乗っているのはウチのチームで一番非力だといわれているDホイール。コーナーでの限界性能はピカイチだけど、立ち上がり性能は最悪。」

「それじゃあ……。」

「ところがこれで氷室さんに勝った男がただ一人存在する。」

「それは、まさか……。」

「そう、やつこそこのコースの伝説となっているシティナンバーワンのDホイラー。」

「鋼のトリプルレッド……。」

「そうだ。」

ギャラリーが話をしているうちに、遊星が第一コーナーに突っ込む。

「あれは、高速で抜けるライン！」

「決まったな……。これで氷室の勝ちだ。」

ところが、この直後に起こった出来事に人々は驚きの声をあげた。

「ま・まさか・・・！」

彼らが目にした光景、それは遊星が地面と平行となるようにDホイールを滑らせている光景だった。

「あ、あれは・・・！！？」

そして遊星はコーナーの出口にかけて少しずつアクセルを開けてゆき、Dホイールを立て直しコーナーを立ちあがった。

「なんだ、あれは。」

「アイツ。これはやるかも知れない。」

「どういことですか？」

「今のコーナリングは、ウルトラDの難易度をもつドライビングの中で一番高度なテクニックだ。一気にコーナーに侵入し、アクセルを開けたまま高速で抜けるためのテクニックだ。」

「それはどんなメリットが・・・？」

「あれなら先のヘアピンで三速あるいは四速で抜けられる。いくら超低速セクションでも、コーナーからコーナーまでアクセルを開けられる時間は、他の低速セクションよりも比較的長い。つまりストレートで氷室さんに接近できるってことだ。」

「でもパワーはあのDホイールは300馬力しかないって。」

「確かに。二速、三速はな。でもあのDホイールは、もともと超高

速ステージ専用マシン。六速10000回転で最高時速350キロのな。」

「そ、それじゃあ!？」

「ああ、この先の直線が見ものだぞ。」

(フツ。いいマシンだ。)

遊星は超低速セクションを四速で駆け抜けてゆく。そして最後のコーナーの出口で氷室の尻を捕まえた。

「何だと!?!？」

氷室は再び立ち上がりで突き放そうとするが無駄だった。所詮低速域からの立ち上がりには優れていても、高速で迫る遊星のマシンに並ばれた。

そして、ジャンプ!!

遊星は着地で二速まで速度が低下。それに対して氷室は立ち上がりで、ジャンプの初速時のスピードで開いたマガジンをかバー!

勝負は最終コーナーに・・・。

氷室はアクセル全開のノーブレーキングの突っ込みを見せる。

遊星は一瞬迷った。このDホイールは低速でのコーナリングは齒が立たない。

（このまま失速か……。いや、俺はあきらめない。絶対にこいつに勝つ。）

遊星は一番アウトのラインを選んだ。

インの氷室、アウトの遊星の壮絶な対決が始まった。

遊星は全開でアクセルを開けアウトの壁の溝にホイールを挟んで、驚異的なスピードでコーナーを飛び出す。

それに引き換え氷室はアクセルターンを駆使し、最短距離を抜ける。

そして加速競争。

遊星の魂の加速。

そして……。

激闘は終わった。

引き分けという結果で。

「ありがとう。今までバトルした中で一番しびれた。」

「こっちこそ。」

そして二人は互いの手を出し合い、友情の証が結ばれた。

「遊星。」

「アキ、父さんに、母さん。どうしてここに？」

「アキちゃんが泣きながら話したよ。今日の学校でのことをな……。」

「アキ……。」

「遊星。アキちゃんの涙。どう責任取るつもり？」

「俺は……。アカデミア杯でみんなと戦い、優勝する。」

「できるのか？今の状態で。」

「今の俺にあるものは何もない……。そして何かを得るには攻めなければいけない、そのことをさっきのバトルが教えてくれた。」

「アキちゃん。どうだ？今の息子は……？」

「はい、大丈夫です……。いつもの遊星に戻ってるわ。」

「すまなかった、アキ。」

「こっちこそ。遊星が苦しんでいたのに、力になれなくてごめんなさいね。」

「さあ、問題はかたずいた。家に帰ろう。」

「ああ。じゃあ、また会おう。氷室。」

「おう、今度はデッキも持ってこい。俺とデュエルしようぜ。」

「もちろんだ。」

「じゃあね。」

こうして四人の姿は、夜の闇に消えていった・・・。

走れ！飛べ！遊星！！（後書き）

チャ・お疲れ、遊星。

遊・どうして俺をグレさせた？

チャ・遊星のテクニックを見せつけたくて・・・。

遊・いくらおれでも、あれは無理だ。

チャ・いや、できるって。お前人間じゃないか・・・ら・・・。

遊・次回はまともになるのでよろしく見てくれ。

チャ・勝手に終わらせるなー！！

越えなければならぬ壁

アキ side

あの勝負から遊星は変わった。

ちやほやされるのには変わらないけど、それを受ける態度が変わった。

今までならちよつと口元が緩んでいたのだが、今はとても辛そうな目をして少し視線が下がる。

吹っ切れるきつかけをせつかくつかんだのに、それを台無しにしてしまう。

でも遊星は強いから、周りから見ても誰も自分の気持ちを察してはくれないことにも文句も言わない。

まだ遊星の心は閉じられたままだった・・・

- 昼休み -

アキは遊星を屋上に呼んだ。

もともとそうする予定だったらしく、アキは遊星と自分の分の弁当を持ってきていた。

二人だけ話がしたいという一心で、アキは遊星を誘ったのだ。

「待ったか？」

遊星がやって来た。

「ううん、私も今来たところ……。」

（嘘よ。本当は一年くらい待っていた感じよ……。）

「それで、話っているのは……。」

「あなたのことよ。」

「……。」

「私があんなことを言ったから遊星怒ったんでしょ？」

「いや、あんなことは言われて当然だ。」

「ううん、私も言い過ぎたの……。そのせいで遊星は今の自分を失ってしまったかのように亡霊い見たいになってしまった……。でもあなたはそれを誰にも出さないで、自分の心の奥にしまいこんでいる……。私には……。私にはもう耐えられないの……。遊星を助きたいの……。」

アキは目に涙を浮かべながら言った。

そのまっすぐな眼差しは遊星の心を震えさせた。

「アキは悪くない。悪いのは俺の方だ……。俺は今まで心のどこ」

かで自分が一番だと思いあがっていた……。そしてアキやみんなを傷つけ、迷惑をかけた……。でも俺はこれからどうすればいいかわからない。俺はもうあの日以来、自分のデツキを信じる事ができなくなってしまった……。デュエルしかできない自分からそれを取ったら俺にはもう何も残らない……。俺は……。俺は……。

遊星の心が初めてこぼれた。

アキは自分の心と体と言葉で、遊星の冷え切った心と向き合おうとした。

「遊星、もしかしてあなたは私たちがあなたが有名人だから一緒に思っているの？それは間違いよ。」

「間違い……。」

「そう、確かに私は遊星とはデュエルを通して仲良くなった……。でも私は違うの……。私が遊星と一緒にいるのは、遊星がだれよりも優しいからよ。」

「俺は、優しくなんかない……。」

「いいえ、だってあなたは私が辛い時、悲しい時、苦しい時、いつも傍で自分のことのように励ましてくれたわ。私はあなたに頼ってばかりよ。でも、あなたは違う。自分のことを絶対に他人に漏らさず、常に一人で思いつめてる。他人に心配をかけたくないから、他人には頼らない……。そんな不器用なあなただから私は傍にいたいの。」

そう言つて、アキは遊星の隣に腰掛け、手を握った。

アキの手から伝わる温もりが遊星の手の血管を通して、遊星の心を温める。

「私を・・・頼つて・・・。」

アキは遊星の肩に自分の頭を預けた。

遊星はアキの肩にそつと手をやり、自分の方に引き寄せた。

そんな時間が流れゆく。

ゆっくり、ゆっくりと遊星の心が満たされてゆく。

そこには安らぎの空気が漂っていた。

遊星とアキの絆が深まった忘れられない一日となった。

越えなければならない壁（後書き）

チャ・遊星、お前何やってるの？

遊・アキが勝手にやったことだ……。大体何でお前はアキにさせ
たんだ？

チャ・俺も寂しいから……

遊・そうか……

チャ・人ごつのように……。ああ、俺もほしいな……。幼馴染……

遊・ドンマイ……。これいくと萎えそうだから打ちきります……。
。次回もよろしく願います。

チャ・カノジヨ欲しーよー！！！！

キモチ（遊星編）

遊星 side

あの日からアキに対する見方が変わった。

今まで幼馴染なのだから自分傍にいて当たり前前の感覚だったのが、今は自分の傍にいてくれるありがたみをこの上なく感じている。

しかし、俺はアキとこれからどう接していけばいいのか、将来どういう関係になっているのか、そんなことばかり考えるようになった。

そして、俺はむしゃくしゃした自分を誰にも見られなくなかったので、一人屋上で空を見上げていた。

いつもと同じ青空が広がっているが自分の心のせいだろうか、少しくらいと感じた。

そんな時、入口から足音が聞こえてきた。

アキだった……。

「遊星、もう最終下校時刻十分前よ。」

「もうこんな時間か……。」

「さあ、出ましよう。」

「そうだな。」

俺は近くにほっぽってあった鞆を手に持って、アキの跡を追った。

「もうすぐ本戦ね……。」

校門をを抜けてしばらくして、アキが重い口を開いた。

「ああ……。」

「やっぱり吹っ切れてないのね。」

「……。」

俺は何も返せなかった……。

「遊星、この間私が言ったこと覚えてる？」

「もちろんだ。」

「じゃあ、遊星はどうしたいのか教えて？」

「……わかった。俺は奴にリベンジがしたい。大勢の学園生の前で俺の方が強いということを見せつけたい。だが、その機会がないんだ……。」

「そう、知ってた？アカデミア杯にはエキシビジョンマッチがあって、東西アカデミア初等科、中等科の代表一名ずつがガチンコで対決するの……。それも閉会式前の会場だね。」

「!？」

「わかった？つまりあなたはそこに出ればチャンスがあるってことよ。」

「どうすれば出れるんだ？」

「簡単よ。アカデミア杯で初等科MVPを取ればいいのよ。」

「MVP・・・。」

「そう。でもMVPになるには、ただ強いだけじゃだめなの・・・。」

「

「どういうことだ？」

「MVPになるには、デュエルへの思い、相手への優しさと言ったところも審査基準に入るわ。つまり真のデュエリストでなければならぬの・・・。」

「真のデュエリスト・・・。」

「どう？これであなたの気は晴れそうかしら？」

「ああ、晴れそうだ。もう迷いはない。」

「わかったわ。私も協力するわ。」

「ありがとう、アキ。」

そして二人は夕焼けの空が包み込む町に消えていった。

キモチ（遊星編）（後書き）

チャ・遊星がんばれ!!!

遊・次回も応援してくれ・・・

チャ・どうした？

遊・最近デュエルしてないな・・・。

チャ・すまないな・・・。ダンディライオン使いたい？

遊・どうしてだ？

チャ・シンクロデブリダンディにしたいから。

遊・おる埋とか使いたくない。

チャ・じゃあ、次の相手それね。次回もよろしくお願いします。

開幕！・・・その前の話（前書き）

お久です。

開幕！・・・その前の話

「いい風だな・・・。ひんやりしていて・・・。」

遊星は自分の部屋のベランダの手すりに身を預けながら、物思いにふけていた・・・、がそのとき、

「パン！」

どこからかプラスティックの当たる音が聞こえ、

「ガン！」

と、手すりから金属音が響いた・・・。

遊星は周りを見回したが、それらしい人影はいなかった・・・。

すると、遊星の部屋の電話が鳴りだした。

「もしもし。」

「運がいいね・・・。俺様の鉛の玉から逃げるなんて・・・。」

相手は変声機を使っていた・・・。

「今のは、貴様が・・・！」

「そう、だが俺様が欲しいのはお前の命ではない・・・。」

「なんだと!？」

「俺様が欲しいのは、お前の女だ。」

「俺には彼女はいないぞ!」

「ならば貴様には何も言う権限はないな……。これから存分に味あわせてもらう……。俺様のこの舌でな……………」

「やめろ!アキから離れろ!!」

「ほう、なぜ十六夜アキだとわかった？」

「俺の彼女に一番近い存在だからだ……………」

「つまり、好きということか……………」

遊星は黙ってしまった……………」

答えが見つからないのだから……………」

すると「男」は無情にも

「5秒以内に言わないと、やるぞ!!!」

と脅迫してきた。

「5・4・3……………」

カウントダウンが始まった。

遊星は・
・
・

開幕！・・・その前の話（後書き）

何やってるんだ！俺は！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8693r/>

遊戯王5D's another story

2011年10月7日23時36分発行